

大 国 隆 正 の 立 場

山 本 寿 夫

一

我国の重要な古典として、まづあげられるべきものは記紀二典である。日本書紀は重要な古典として、古来最も尊重され、朝廷においてもしばしばその講書が開筵され弘仁、承和、元慶、延喜、承平、康保の年間の講書によつて私記の諸本がのこつてゐるのである。注釈書として有名なものをあげても、中世においては卜部懷賢の釈日本紀、忌部正通の神代卷口訣があり、又一条兼良の日本書紀纂疏や吉田兼俱の日本書紀神代抄、清原宣賢の日本書紀環翠抄等がある。さらに近世に入つては、日本書紀の研究は極めて活潑に行はれ、注釈書としても、度会延佳の日本書紀神代卷講述鈔をはじめとして、ほとんど枚挙に遑ないほどである。これに反して古事記に対する関心は古来薄く、注釈書においてもまことに寥々たるものであつた。ところが国学の大成者本居宣長出るに及んで、この大勢を厳しく批判し、畢生の大著古事記伝を著し、

(三) 抑意^{ヨコゴト}と言^{コトバ}とは、みな相称^{アヒ}へる物にして、上^ウ代は、意も事も言も上^ウ代、後代は、意も事も後代、漢国は、意も事も言も漢国なるを、書紀は、後代の意をもて、上^ウ代の事を記し、漢国の言を以^テ、皇国の意を記されたれば、その意も事も、言も、あひかなはざること多かるを、此記は、いさゝかもさ

かしらを加へずて、古へより云へたるまゝに記されたればその意も事も言も相称^{アヒ}て、皆上^ウ代の実なり、是れもはら古への語言を主としたる故ぞかし、すべて意も事も、言を以て伝^フるものなれば、書はその記せる言辭^{コトバ}主には有ける、又書紀は、漢文章を思はれたるゆゑに、皇国の古言の文は、失たるが多きを、此記は、古言のまゝなる故に、上^ウ代の文も、いと美麗^{ウツクシ}しきものをや、

と古記典等総論において論じて、書紀に対する古事記の価値を高唱し、古言古意尊重の立場を明かにしたのであつた。書紀は漢文章の潤飾^ニになづみ、漢意に惑はされて古意をはなれてゐるものであるから、反つて「古学の害^{ガマクゲ}」ともなる惧れがあるに反して、古事記こそ皇国の古語によつて、素直に記述されてお^り「あるが中の最上たる史典^{フミ}」と定めらるべきものとされるのである。即ち「言痛^{コトツク}きまでその神代卷には、注釈書なども多^ク」い書紀に対して、古事記の価値を優位におかうとすると共に、古意を明かにするには古言によらねばならぬといふ彼の研究方法を明かにし、かつ漢意をもつて古に対することは最も警戒されねばならぬといふ彼の根本的立場を明かにしてゐるのである。

享和三年「呵妄書」を著述して、宣長の学徒として登場した平田篤胤は、当初は全く宣長の学を継承するものであつた。その著古道大意

において

(三) 古事記ヲ以テ、有ルガ中ノ上タル史典ト定メテ、日本紀ヲバ、是ガ次ヘ立ラレタモノデ、仮令ニモ、皇大御國ノ學問ニ、志有ラン輩ハ、努々此意ヲ思ヒアマラヌヤウニ仕タガヨイト、懇ニ言ヒ置レタデム。

と師宣長の言葉を引き

其委キ訣ハ、師ノ古事記伝ノ始メニ、具ニ記シ置レマシタガ、其大略ヲ申セバ……

と断り書きをしてゐるやうに、篤胤独自の見解・立場を見ることを得ないのである。ところが、文政二年の古史徴や古史徴開題記においては、すでに

(四) さて今に伝はる古記の中に、古事記ばかり古きはなく、其ノ優れて貴たき籍なること、また書紀のつとめて漢文章を飾られたる故に、古への意言を失れる事の多かるなどの事は、師の論はれたる如くなれど、古事記にも事実に錯乱たる事の多かるを、其ノ謬を見得られしことは、其ノ宜しき事を見得られたる如くは委からず、書紀の優れたる事を見得られしことは、其ノ非を見られし如く委からず。

と述べて、明らかに、師宣長の古事記偏重に対して批判を下し、宣長とは逆に

(五) 然れば皇大御國に生れたらむほどの人は、此の歡慮を心として、万の学をおきて、まづ御紀を拝み読み、上古の御道を畏み学び明むるぞ、物学がの本務なりける。

と日本書紀をもつて、第一に読むべきものとして、古事記を「最上の

史典」とする宣長から大きな転回を行つてゐるのは注目すべきことである。

日本書紀が多くの異伝を一書目として、広く輯録してゐることは、その長所であり、また特色でもあるといはれるところであるが、この点について宣長は、

(六) 此記は、かの一書どもの中の一ツにして、みな書紀にえらび取られて、かれは事備れり、との論は謂たり、誠に書紀は、事を記さるゝこと広し、はた其年月日などまで詳にて、不足ことなき史なれば此記の及ばざること多きは、云フもさらなり。

と一応その長所を認めながらも、すぐに、

(七) 上ツ代に書籍と云物なくして、たゞ人の口に言伝へたらむ事は、必ス書紀の文の如くには非ず、此記の詞のごとくにぞ有けむ、彼らはもはら漢に似るを旨として、其ノ文章をかざれるを、此レは漢にかゝはらず、ただ古への語言を失はぬを主とせり

と反論して、古事記の詞の優れてゐることを主張し、あくまで古語古意を重んずる立場を強調してゐるのであつて、一書目を特に着目重視してゐる点は見られないのである。これに対して篤胤は、

(八) 継々替れる撰者たちの、見及ばれけむ古記をば、漏さじと挙て、一書ニ云ツと記し、其ノ一書の中なりし異伝をさへに亦一云一云など、然しもなき説までを、悉載されたる事は、深く慎み重みせられたるにて、後に見む人の心をもて、撰び採しめむとの事なりけむ云云

と書紀撰者の慎重な態度を推称するのである、又

(三) 一書云々とて、異説をおほく挙られたるは、姑く正書は立たれど、其の撰びの正実の旨に叶へりや叶はずや、決かね給へる故に、なほ後に頭れ出たらむ書等に考へ合せて、撰び探てよとの御事なりけむこと論ひなし。

とも論じてゐる。これは古伝の中には終始一貫せず、前後矛盾する記事も含まれてゐるが、書紀はこれに対して一応正史と定められたのであるが、神代の事実はいづれとも決定しが多いことが多い。そこでしばらく引く異伝を列挙して、後世の考定に期待したのが書紀撰者の意図であるとして理解してゐるのである。篤胤においては、古道の基づく古代の事実の探究が強く意識されてゐるからしてこそ書紀編纂者の慎重な態度が特に喜ばれたのであるといつてよからう。故にもしも、「神隨なる道の実事」を伝えてくれる古伝があれば、記紀以上に尊重しようともするのである。

(四) 古き祝詞に見えたる事実は、その御伝へ坐る御故事にて、故事の本にすれば、古事記神代紀の伝へはあれど、古ノ伝の有ルが中に、殊更に尊み重みすべき物なりける。

といつて、祝詞は記紀とは別に尊重されなければならず、さらにいへば、「記紀二典の謬錯れる伝へをも、太詔詞事の有かぎりは、其に依りて正し弁ふる物」であつて、むしろ太祝詞は記紀以上の価値をもつ、
「有るが中の最上の伝と」すべきであるとし

(七) 諸氏を明むる学びは、其神人の出自を知る学なれば、此を熟く明にせずては、事実の混乱を知ルこと能はず、事実の混乱を明にせずては、道の闡奥を知ルこと能はざればなり。斯て上の二典は、天皇の大御系統は、よ

く明に知られるれども、臣連八十友緒の出自を明に知こと能はず、其を知る書は、新撰姓氏録になも有りける。

と述べて、古史解明上、記紀二典を補ふものとして、姓氏録の価値を高く評価し、或は

(八) 古き風土記の趣を取り給て考ふるに、各国にして、旧より聞伝たる古老の説を専と記さしめ給へる物にして、古事を証す便となること少からず、
いとも珍たく貴き籍なるが云云

といつて、風土記の存在をも重視することになるのである。要するに篤胤においては、あくまでも古の正しい事実を探究し、それによつて古道を明かにしようとしてゐるのであつて、古典は古実を伝へるが故に尊重されるべく、古典そのものに絶対の価値があるわけではなくて、古実究明の資料としての価値があるのである。したがつて日本書紀の編纂態度は尊ばれるべく、紀の訛伝を補正すべき正実の古伝が、祝詞の中にあるのであれば何物にもまして祝詞は珍重すべきものであり、又諸家先祖の事実が知られ、地方の古実が明らかになるのであれば、姓氏録も風土記も記紀同様に重要視すべきものとなるのである。かくては事実の解明に資するものとして、漢籍をも参照しようとするのも当然といへやう。かくて篤胤は自己の識見によつて古伝を整理して、古代の事実を確定しようとするのである。これすなはち古史成文であり、古史徴、古史伝の著述となるのである。これによつてこれを見るに、同じく国学者の道統に属するものゝ、篤胤は宣長に比して、国語学者であるよりはむしろ歴史学者的色彩が濃厚になつてゐるといへな

ばなるまい。

二

さて宣長、篤胤について、「国学の五祖とも思はれ」た隆正、^(一〇)「い

とわかかりしとき、平田篤胤の紹介にて、本居宣長門人村田春門が並樹といひしころ、その門人となりて学びし」、「平田翁の門人帳を見れば、おのれが十六のとしの門人帳に前名にてかき加へてある」大國隆正は、記紀に対していかなる態度をとつたであらうか。隆正は己の学問を本学と自ら称へるのであるが、

(三) 本学といふ名は古書に見えざれど、本教といふことあれば、その本教の旨をまなびしる學術なるにより、これを本学といふなり。

といつており、その本教といふのは、

(三) 本教とは、わが天皇の御系譜にして、天地のいできはじめの、真をつたへ給へる神代の古事をいふ^(一四)

のであつて、「さてその本教といふ名目は、隆正があらたにつけていふ名にあらず。太朝臣安麻呂主のかゝれし、古事記奏上の序に見え」てゐるといふのであるから、やはり彼の主眼とする所もまた「古事古言」の究明にあつたことは明瞭であらう。しかうして又

(三) そもそもこの天地は、天之御中主神の中を本にしてなれるものなり。されば本教本学の基本は、たゞなかという一言にありと知るべし。

といふのであるから、まづ古事記巻頭の、天之御中主神からみてゆかねばなるまい。篤胤の古史伝には

(三) 天之御中主神。御名義、天は阿米と訓べし。阿米とは蒼々として、上方より始めて、四方に広く遠く見遙かさるゝ疆界を云ふ。さて此の疆界ある内を与と云ふ。云云

と説明しはじめて、与と曾良との關係を述べ、その曾良の蒼々と見ゆるは、天地万物を主宰される大神の御氣勢が虚空に充滿してゐるためであり、神速須佐之男命の、天壁立極巡坐而云々と有るを考へ合せて、この大虚の外方に涯りあることを知ると説き、此の頂上の処すなはち北辰にて、大凡円形であつて、何時成たるならむといふことは伝へなければ知ることとはできないけれども強いて按ふに、総ては「物生出たる頃に成整へる物であらうといつておる。又

(三) 御中は、師云、真中と云むが如し、凡て真と御とは、本通ふ辞なるを、やゝ後には分て、御は尊む方、真は美稱ると、甚しく云と、全きこととに用ふ、云云

と、師説をあげ

(三) 主は大人と同言にて能宇斯の切まれるなり。故レ古へに宇斯は、必某之宇斯と之を加へたるに云ひ、奴斯は某主と直に連ねて、之を加へぬに云へり云云

(三) さて宇斯波久と云も、其処の主として、領居ることなり、されば此神は、天ノ真中に坐々て、世ノ中の宇斯たる神、と申す意の御名なるべし、と有り。実に此師説の如し。

と師説を一応忠実に継承し、更に

(三) かくて此ノ大神の御在所は何処ぞと云に、此は天の最中のいと高く、寂

寛にして動き徙らざる処、すなはち謂ゆる北辰にて、これ天の本綱たる処なるが、御中主ノ大神は此ノ処に鎮り坐せるなり。扱それより、五百綱千綱を引延て、編成せる如く、宇宙の万ノ物を、悉く主宰り給ふ事と聞えたり。

と述べるのである。これは師説では「たゞ天の真中に坐々て、とのみ云はれたるはいかゞ。さては何もなき大虚空に坐ませる趣にて、余りにたゞしく聞ゆ」るからであり、「諸越籍に、天綱恢々疎而不失とも、天綱雖疎終不_レ漏也」とあり、或は又「漢籍に天下を治むることを経論すと云へる」のを参照してみるからであるとするのである。してみれば、篤胤は宣長が語意の解明にとどまつてゐるに飽きたらず、事実_ニこれをみようとするのであり、その為には漢籍といへども参照されねばならなかつたことは注目されなければならない。がしかし記紀の文章が直接に表現してゐる事実にとどまつてそれ以上に、恣意的な思弁は試みようとはしなかつたのである。ところが隆正においてはその様相を全く異にしてゐるのである。いまその主著である古伝通解をみるに

〔三五〕「みなか・御中、なかに三つのころあり。あひだをいふなか、内をいふなか、かたよらぬをいふなか、これなり。かたよらぬなかにまた四つのころあり。うごかぬなか、なかにつかぬなか、なかにつかぬなか、つらぬくなか、これなり。まづこれらの差別をときて、なかといふこのころをくはしくしり、中は道のものなることをさとるべきなり

と述べて、なかといふ語の分析より解明をはじめてゆくのである。ついでこれを説明して次の如く

〔三六〕古事記に其石ヲ置中、各対立而といひまた各二置天安河一といひ、老夫与二老女二人在而、童女置レ中而泣とあるたぐひは、あひだをいふなかなり。同書に五柱子之中天善比命者といひ、鳴鏑射二入大野之中一とあるたぐひは、うちをいふなかなり。同書に詔二之上瀬者瀬速、下瀬者瀬弱一而於二中瀬一とあるたぐひは、かたよらぬをいへるなかなり。

とこれを例証し、「この三つのなかを合せてみれば、おのづから眼前に一円相はあらはれいづるもの」であり、「外国にて道をととき教をたつるものみな、この一円相をもとにたてしは、おのづから天之神道にて、なかといふこのころを得て、つくりいでたるものとしられ」と論をすすめるのである。又一人の思慮は耳目にしたがふものにて、耳目のとどかぬところへは思慮もまたとどかぬもの」で、「一人の目は恒星天にかぎりて、それより外はしることあたはぬもの」であるから、「人の思慮も恒星天にかぎりて、それより外はしることあたはぬもの」であり、「これをもち、人は中といふことはよりなれる一円相にとどまりて、この外にいづることあたはぬことをさとるべき」であり、天地は「い_三かばかりひろげてときても、それより外、それより外とおしきはむれば、そのはてをとくことあたはず、つひには無辺といひてやむ」のであり、「天地のはじめもそのごとく、それより前それよりまへとおしきはむれば、そのはじめをいふことあたはずつひには無始といひてやむ」のであつて、真言宗で金剛法相といひ、禪宗で一円相といひ、或は宋代の周茂叔の太極図の如く、みな「中字の相を世にあらはして道の至極を」示すことになるといふのである。こゝまでくるに既に速く語、本来の意義をはなれて、著しく放恣な思弁を行つてゐる

(三) 中線とどまれば、たひらかに四方へのびゆくものなり。自然の道なり。されば野また沼など四方にわたりてたひらかなになる。塗るのぬもたひらかにするところなり。寝るのぬはたひらかなになるところなり。

(四) これにより、ぬしのぬも国内をたひらかにをさめ、家内をたひらかにをさむべきものなることをさとるべきである。と結論するのである。まことに奔放なる思辨といふほかはない。

三

次にたかみむすびのかみ・高御座巢日神、かむむすびのかみ・神産巢日神についてみることにする。これについては

(五) ものには混分、合離、集散といふことあり。この六言三対は似たることにて差別あり。さてむすぶの対にとくといふことあり。分・離・散の三つはとくるにて、混・合・集の三つはむすぶなり。これによりてさとるべし。むすびのかみは、混・合・集の三つをつかさどりたまふかみにておはしすなり。

(六) とまづ「むすぶといふことばに多義を含みてある」ことより説きはじめ

(七) 支那にては木火土金水の五行むすばりて万物になれりといひ、天笠にては地水火風の四大むすばりてなれりとき、西洋にては、ふるくは水火土気の四元行むすばりてなれるものと云ひしを、いまは五十余の元素さまざまに結ばりて物にはなるものよし、解剖の術をつくしてこれをいふあり

(八) 五行説を参照し、「隆正考ふるに、五十の元素もつまるところは五つにて、支那人のいふ五行こそよかりけれ。」として「しかはあれど後世の説はよからず。今新にこれをと」くといつて

(九) そもそも地球に磁石の性あり、万物に鉄の性あるによりて万物地球につきてはなれず。磁石の南北をさすは、磁石に地球の性あるゆゑなり。磁石は小地球にして、地球は大磁石なりとおもひしるべし。云云

(十) 西洋理学の知識にもとづく彼独特の五行説を展開してゆくのである。しかも「これは、わが神代の古事に考へ、合すること多きによりたる説」であつて「垂加流の神道に土金伝など云ふこともありて、五行配当の説あれど浅はかにしてとるにたら」ないものと同日に語るべきものでないと自信のほどを示すのである。しかうしてこの展開も結局

(十一) 天之御中主神は、小中のむかしよりその中点におはし、中線をとりにて集散・合離・混分にこゝろなく、集まれば集まりて御中主となり、散れば散るにまかせて、その御中主となりておはします自由自在の御霊なり。これを万物の根とす。仏家にて真如大覚といひ、不生不滅とするは是なり。儒家道家にて執中又守中などいふは声もなく臭もなきこの神霊にしたがふをいへるものなり

(十二) と彼の思辨の体系の根本である「なか」に帰一してくるのである。しかうして又こゝよりふたび出發して

(十三) たかはたけ・たくとはたらきて、その中点よりおこりて、かぎるところまでのびゆくをいふことばなり、云云さればこの神霊は中点よりおこりて外辺までのびゆく根元の霊にておはします。」

(十四) かむは四方八面より中点をおすをいふ。嚙も下歯にて上歯をおすなり。鼻をかむも左右より中をおすをいふ。被るは上より下をおしつゝむなり。さればこのかみは外辺より中点を圧したまふ神なり。むすびは外辺を中点にむすびたまふによりていふなり。

といひ、或は

(六六) ひといふ一言に火・氷・燗・障の四つのこゝろあり。火をとくものは氷にして、氷をとくものは火なり。同言にして相反し、この妙用をなす。タカミムスビのタカに焚くこゝろあり。カムムスビのカムに消す心あり。氷氣にて嚼めば火は消ゆるものなり。火氣にて焚けば氷はとくるものになん。これをおもへば陽は陰をしりぞけて陽をむすび、陰は陽をしりぞけて陰をむすび、陰陽並びたてるものと知られたり。陰陽和合せざるうちは、かくの如きものになん。タカミムスビ・カムムスビは独神とありて、和合せざる陰陽なり。イザナギ・イザナミは雙坐ナラビマスとありて和合する陰陽なり云云

と展開し、これより動植物の雌雄・発生・生育よりはじめて、天地間万般の事物現象に涉つて、こまかに説明をなし、その論まことに整然として一の哲学体系を見るの観があるのである。しかうしてこの場合支那の陰陽五行説や西洋理学が利用され、或は咀嚼されてかなり重要な役割を果たしてゐることは注目されねばなるまい。これ正しく宣長が全力をあげて排撃しようとしたことであり、この排撃こそ宣長学の根幹であつたからである。

四

さて次には、隆正が「これらの箇条をあきらめたる人にあらずば、神道にくはしき人とはいひがたかるべし」といつて特に重要視したといふよりも、むしろ彼の神道説の根幹ともいふべき、「神代に五度の沿革あり、三度のくによさしあり。幽顕分界のことあり。分靈サキミタマ・合靈クレミタマの大事あり。また太卜フトマリ・大被等の妙理あり」といふ五箇条の中の分靈・

合靈について考察することにしよう。「又あらみたま・にぎみたま・さきみたま・くしみたまといふことあり。これは神にも人にもあるもの」であつて「支那の窮理家も、西洋の窮理家も、未だしらぬ神理の妙」なるものであるとして、精しく考究されるのである。

(七二) あらといふことばに二の義あり。また三の義あり。二の義とは、荒び、疎びなどいふたぐひのあらと、あれをとめ、あれづくなど、古言にいひて、よく上に仕へ奉るをいふあら、とふたつなり、三の義といふは、生シの字をあつるあれ、有ユの字をあつるあり、廢ヘの字をあつるあれ、これなり。ものみな生れいでて世に有り。つひには廢るゝことあるものなり。これを初・中・後とみるべし。これに前の二義を合せ考ふれば、暴アラるればやく廢ヘれ、奉マツれば永く有り。

と独特の語義の説明をなし、ついで

(七三) あらみたまは生靈アラシモノのこゝろにて人のうまれいづるはじめより、もちてうまるゝ靈をいふ。これに暴アラと奉マツと二義をもちてうまるゝものなり

として、これより「奉仕るこゝろは」すべて「本につくこゝろ」であるとして、本につくあらみたま、本につかぬあらみたまのあることをわきまへるべきであるとし、これより彼独特の附本心・相扶心の道德説・神道説を展開してゆくのである。又つづいてにぎみたまについて

(七五) その我をたつる暴戾アラク靈をしづむるものは、たゞしきにぎみたまなり。にぎみたまもまた人ごとにもちてうまるゝものにして、これもまた善悪あり。にぐる・にぐるなどいふことばよりいづるにぎみたまは、つたなくにぎはふ・にぎむなどいふことばよりいづるにぎみたまはたゞしきなり。

これはあひたすく道を成就せしむるたましひになんある。

といつて、あらみたまが、「本につく道をなすもの」であるのに対し、にぎみたまは、「あひたすく道をなすもの」であるとして、文武の道にとき及んでゆくのである。更に、さきみたま、くしみたまも同様にことまかに、しかも広汎に説明し、巧にこれら四霊を関係付けて、内外學術の状況の説明を至るのである。これによつてこれをみるに、隆正においては、同音異義語を巧に対照的に「彼のいはゆる「反対の理」によつて—整理統一して、これを発展・展開して、その論理・根柢の上につつて、現前の道德現象を説明し、強調しようとするのである。この場合極言すれば記紀の語は、彼に思考の出発点と与へるのみであつて、即ち現前する自然現象や道德に対する体系的な一貫した説明をなす思辨の出発点として役立つてはいるが、記紀そのものにおける、記紀の言葉としての解明は二の次になつてゐると言つてよいであらう。勿論このことは他のあらゆる語—たとへば、あめ・天—においても全く同様である。

五

隆正は一般から誘られて「蘭学習合とい」^(三七)はれるのであるが、その理由なしとしないのである。いま「別天神」^(三〇)にたいする彼の説をきかう。「別天神の説、本居翁の説はことゆかず」として

(二六) 別は総別の別にして毎の字のこゝろなり。別の字は天へまでかゝることばにて、別天をことあめとよみ、別天神といふこゝろにて、コトアマツカミといふことゝしるべきなり。本居翁の説にては、別にてきり、天神を

つゞけてみるこゝろにて、解説同じからず。

とまづ宣長説を批判して、次に自説をのべるのである。

(二七) 別天は天学家のいはゆる緯星天なり。億万の緯星天あつまりて恒星天となるときは、その天毎にこの五柱の天神おはしますなり。よくおもひても見たまへ。ものあれば必ず靈あり。天地にいかで靈魂なからむ。ほしは火石のこゝろなり、遠くみゆるほしは、五星と月との外はことごとく日にしたがひて、昼夜に一周すれども、万古その坐位をあらためず。一周することみは、わが動をしらぬこゝろにて、まことは日ととも恒星はうごくことなし。日輪とひとしく外陽の世界なれば、つねに火もえやまずして昼夜のわかちなし。六緯星は日を中心にしてめぐり、十一衛星はまた六緯星を中心にしてめぐる。これもまた本星と衛星の御中主にして、天之所立また天之常立の御名にかなひ、かきはにときはにその行度をたがふることなし。明暗諸球の常立、神代も今も行すゑもたがふべからず。これは日球地球のみにあらず、明体の高天原皆かくのごとく、暗体の葦原中国悉く然り。これによりこれを別天といへるなり。

と解説するのである。これは宣長が古事記伝において

(二八) 師は、別ノ字をコトトニと訓れつれどわろし、又ワケと訓るもわろし。云云。別は許登と訓べし、其ノ由は先ツ書紀の伝々に、多く國之常立神を以て最初の神として、此ノ五柱ノ天神を挙ざるは、たゞ此ノ國土の方に成り坐る神をのみ申し伝へて、天上に成り坐るをば、別なる神として略きたる物なり、又一書に、先ツ國之常立ノ神などを挙て、次に又曰とて、天上なる神等を挙たるも、天上なるをば別なる神とせるなり、天上なるを先に挙ずして、後にしも挙たるは、別にせる意なり。又曰と云フは、一日と云とは異にして、異説には非ず、同書の内に、又別に、如此言りといふ意なり、されば別と云るも其ノ意にして、天上に成り坐るをば、別なる神とし

て、分たるものなり。云云

と語義に徹して解説し、それ以外には一步も逸脱すまいとする厳密な態度と比較し、或は篤胤が古史伝において、この師脱をそのまゝあげて、^(六五)「上ノ件ノ師説まことに然る言なるに就て思ふに、^(六六)釈紀に、^(六七)といつて釈記に師説と同様の説あることをあげて、宣長がこれを「見落され」たことをついてゐるのみであるのと、比較するとき隆正の解説がいかに蘭学的であるかを分明に知り得るであらう。しかもこのことは彼の著作全般に亘つて頗る濃厚にあらはれてゐるものである。たとへば

「天都詔詞太詔詞考」においても

^(六八) 神代卷はすべて日球と地球とのくみあひをいへるものにてあれば、日球地球のありかたにくはしからでは解かれぬものとしるべきなり。これをしらむとするには天文地理の学によらざることをえず。

とか、或は

^(六九) 地の底は磁石質の磐根なり。磁石に鉄粉のすはるる如く万物みな下津磐根に吸はれてあるものなるにより、かくの如くいへるなり。

といふが如き解説が頻出するのである。これによつてこれをみれば、隆正の古典に対する解説は、宣長篤胤に比較するとき、ひろく蘭学の知識を援用することによつて、著しく自然科学的風貌を呈してゐるのである。しかしながら、古典の記載事実を自然科学的に検討するといふのではなくて、あくまでも、古典の言葉や契機として構成体系化された彼の宇宙観、或はそれにもとづく記紀の語の解説そのものに自然

科学的風貌を呈せしむるにすぎないことを、特に注意しておかねばなるまい。

六

以上二、三、四、五、において検討してきたところを要約すると、宣長は注釈学的でありひたすら古意の究明にのみとどまらうとし、篤胤又師説を承けて、記紀の語の上に直接表現された事実そのものゝ究明より外に逸脱することはないのである。たとへ漢籍を援用する場合においても記紀の語が直接表現するところの事実についての参照にとどまつてゐるのである。これに対して、隆正は記紀の語より出発して、彼のいはゆる反対の理による哲学的思想体系を作り上げようとするのである。記紀の語は、記紀の中における語として説明されるといふよりはむしろ彼独自の思想体系を構成する一つの契機となつてゐるといふ他はないのである。したがつて彼においては、もはや記紀の文体、文章表現の如きものは勿論問題ではなく、神代卷は「天地のはじめ、この地球上に顕露世界のたちたる縁故をつたへられたる」^(七〇)「今のこの天地のかくてあるまことの理をあかされたるものなれば、今の天地に合せてよくかなへるもの」である唯一の古き正しき伝へであつて「^(七一)いまも猶いきてはたら」いてゐるから重要なのである。宣長篤胤においては古意古道を明らかにすべきものであつたものが彼においては実に現在目前に生きてはたらいてゐる事象の意義を解明する理論の立脚点となるものであつたのである。しかうしてこの場合四、における引用例でも明らかなる如く、同音異義語を基礎としてその反対概念を整理統合してゆくといふ方法をしばしば用ゐるのである。この方法にかゝはつ

てくるかぎりにおいて記紀の語は重要な意義をもつてくるのである。又現在生きてはたらいてゐる事象の意義の解明を主眼とするからには、現在の事象そのものの正確な認識が必要となつてくるのはいふまでもないところである。そこで「そはかのあたりの人、紙上の空論をきらひ測量試験の器をつくり、その慮をつくす故いひあてたることも多ければなり。今の天地をしれることは唐土人・天竺人よりよなくすぐれてありけり」といふ蘭学—天文窮理の学が頻りに援用されるのである。つまり記紀の語に出発して展開する彼の体系が、展開し実証される場を提供するものとして、天文窮理の学が盛に利用されるのである。こゝにおいて宣長によつて、きびしく斥けられた「理」は彼においては再び復活してくる、否、中心を占めてくるといつてもよいであらう。如何にしてかくの如きことになつたのであらうか、しばらく彼自身にききつつ結論にかへることにしよう。

七

隆正の生涯は寛政四年より明治四年に至る間であり、その活動の時期は正しく幕末多事多端の時に當つてゐるのはいふまでもないところである。したがつて彼の念頭をはなれぬものは、夷人の入来といふことであつたのである。されば

(三三) 近年外国の船、わがくにに來ることしげくなれり。つらつらそのことのもとを考ふるに、神武天皇統御のはじめより、二千五百年の運にあたり、もの改まるべききざしありて、おのづからかくのごとくよりくることにありぬべし。さらば外国の人の入りくるは、かしこき大御世の御業にて、よろこぶべきことなるを、世の人の、あるひはなげき、あるひはいかりて、

ひたすらにうちしりぞけんとするは、天神地祇のみころを、さとらぬものならんかし」

と時局は認識され、「日本国は四方八面みな海なり。いついづくへ外国の船のよらんもはかられ」ない時節であるから常々外国人との応接を心がけねばなるまい。その応接は儒者でなければ蘭学者となるであらうが、それでは当方より先方のことを聞くにはよろしからうが、^(九四)「かなたよりこなたのことをとはれたらん時儒者・蘭学者にては答にさしつまることある」のであつて、有利な外交折衝は期待できないから国学者をいだして答へさせるべきであるが、その国学者も「外国人に^(九五)応接すべき国学者は、いま世にたえてあることなし」なのであり、「歌よみはかゝるとき何にもならぬもの」なのであるから、「公儀は儒者にあたふる様よりも、おほく国学者にあたへ、書物をも多く集めさせ、外国に答ふべき事をむねとして学ばしめたまふべ」きであり「その国学者となるものも、外国人に^(九六)応接することをむねとし、このことをとはれたらんには、かくこたへん。そのことをいはれたらんには、かくいはんと、かねてそのこたへを作りおき、正大の学意をおしはりて、外国人を^(九七)圧倒せんとおもふべき」であるとするのである。而して外国人に^(九八)我國の優れたることを知らしむるには勿論記紀が重要な依拠として語られるであらうが、それは

(100) いづれのくににても、古昔の伝説ありて、その國を外国よりもたふとくいひつたへてあるものなり。それに執していはるは、井蛙の見といふものにて、万国にわたる公平の論にあらず。」

といはれることになり、「いかにもわが國の伝説のみをひきいでは、

うべなひがたく」おもはれるのは当然であるから「外国の書をひきてこれをあかさ」ねばならないとするのである。つまり外国の書をも参照して、普遍妥当性をもつて語られねばならぬとするのである。

(103) つまり、本居平田のしりにつき、くちかしましく、自国の人にむかひて国自慢をするとは、たがふこと」なのであり、外国人を相手にすることなのである。外国書の参照と普遍妥当の理が常に要求されてゐるのである。この故に彼が「天都詔詞太詔詞考」に

(104) 今、万物の種子のそのはじめを見るに、浮脂のごとき物にあらぬはなし。みな浮脂のごときものになん。是によりて天地のはじめも、またうきあぶらのごときものにてありしことをしるべし。さるを本居翁も平田翁も此説を信ぜず。浮膏のごとしといふは、たゞそのたゞよへるさまをたとへたるものなりとて、古史成文にいたりては、此文をはぶかれたるぞ口をしき、天地初発の浮脂は、日輪となれるものにて、そのあぶら、いまなほやまず、わきいづるによりて日輪の外辺、万古もえやまざるものなり、日輪の実体をおしきはめずして、天地をとかんとするはおぼつかなきことなり。古伝にあしかびの如くもえあがるとあるは、日輪より地球のわかれいでたることをいへるものなり。

(105) と言つてゐる如く「眼前の天地万物を的証にとらず」天文窮理の学を斥ける本居平田の学では役にたためのであり、外国人をも含めて万人に対して説得力を有するためには其の説に理がなければならぬとするのである。いや理をきびしく斥ける本居学それ自身においても強く説得力を有してゐるものは所詮窮理説ではないかといふのである。

(106) 皇國の古風に窮理などこちたきことあらずといはれしも先ひとわたり

はきこえたることなり。しかるに、それまで世の人のおろそかにおもひ過しし、てにをはのすぢをただされて、ことばの玉の緒七卷をかきあらはされたり。隆正これにつきてうたがひおもふことあるなり。物あればかならず則あり。神道自然の中に冥搜してこれをしるを窮理といふ。先生の玉緒は、言語の窮理説なり。それまでたれもこころづかですぎにし三転断続を發明せられしは、まことに後來の語学家の模範にして、たれも間然することあたはぬ明説なり。しかはあれど、皇國の古風にあらず。安麿・人麿、てにをは、を先生のごとくせられしことはあらざりしなり。いにしへあらざりしことながら、それをもて古事記・万葉集その外わが古書をみるに、先生の定められし規律にたがへるは、をさをさあらず。天地分れしよりこのかた、世にあらざりし言語の窮理説を、かくのごとく世に発しなから、皇國に窮理なしといはれしは、うちあはぬこちするなり。

といひ、物あれば必ず則あつて之を窮むるを学といひ、この学、窮理あればこそ本居学も説得力をもつたのであるとするのである。宣長は、(107) 「英俊の才、言語の窮理説は得られてしかども、時いまだ熟せずして、天地の窮理説を得られ」なかつたのであるが今や時至つてゐるのであるから

(108) 外国人は、よくいまの天体をしりてあるにより、かくのごとく説きかせなばわかるべし。

として、精密な西洋天文窮理の説の実験実測の根柢の上にたつて西洋人の末だ知らざる「反対の理」をおしすゝめ(109) 「いつくまでもわが古伝説のすぢをおしたてて、人の世にあるころえより万物の窮理にいたるまで、ことごとくときあきらめ」て強く説得力をもつ学説をうちたてゝ(110) 「わが大日本国のおしへはかかるものぞといふばかり、した

たかにつくろひたてて外国にわたし、外国の人をもこのをしへにしたがはしめんとおもう」のである。

以上要するに、隆正は常に外国を意識する立場にたゞねばならなかつたのである。実にこれこそ隆正の記紀に対する態度をして、宣長・篤胤の姿勢から著しく懸隔するものとしたものであつたのである。かくて隆正は、宣長がかつて古事記伝において漢籍をきびしく批判して

(二二) かく人皆の惑ひ溺るゝゆゑは、凡てからふみの説といふ物は、かしこき昔の人どもの、万の事を深く考へ、其理を求めて、我も人も実マコトに然こそと、信ウツクべきさまに造り定めて、かしこき筆もて、巧にいひおきつればなり、然れども人の智は限りのありて、実の理は、得測識るものにあらざれば、天地の初などを、如此あるべき理ぞとは、いかでかおして知るべきぞ、その類のおしはかり説は、近き事すら、甚く違ふが多かる物を、理をもて見るには、天地の始も終も、しられぬことなしと思ふは、いとあふけなく、人の智の限り有て、まことの理は、測知がたきことを、え悟らぬひが心得なり、凡て理のかなへりと思はるゝを以て、物を信るはひがごととなり、云云

と言つた立場と、全く對蹠的な立場に立つに至つてゐるのである。

註

- (一) 以下については三木正太郎氏の論文に詳しい。芸林第十一巻第五号
- (二) 古事記伝一 本居宣長全集 第一巻 四頁
- (三) 同 右 十二頁
- (四) 同 右 五頁
- (五) 同 右 五頁
- (六) 古道大意上 平田篤胤全集 第七巻 二六頁

- (七) 古史徵開題記 平田篤胤全集 第五巻 七八頁
- (八) 同 右 九二頁
- (九) 古事記伝一 本居宣長全集 第一巻 四頁
- (一〇) 同 右 四頁
- (一一) 古史徵開題記 平田篤胤全集 第五巻 九二頁
- (一二) 同 右 九四頁
- (一三) 同 右 二九頁
- (一四) 同 右 二八頁
- (一五) 同 右 三二頁
- (一六) 同 右 三二頁
- (一七) 同 右 九六頁
- (一八) 同 右 一三〇頁
- (一九) 学統弁論 大國隆正全集 第四巻 一五七頁
- (二〇) 文武虛実論 大國隆正全集 第一巻 一五〇頁
- (二一) 学統弁論 大國隆正全集 第四巻 一五七頁
- (二二) 本学挙要上 大國隆正全集 第一巻 七頁
- (二三) 同 右 一頁
- (二四) 同 右 一頁
- (二五) 同 右 二二頁
- (二六) 同 右 二二頁
- (二七) 古史伝一 平田篤胤全集 第一巻 九八頁
- (二八) 同 右 九九頁
- (二九) 同 右 九九頁
- (三〇) 同 右 九九頁
- (三一) 古史伝一 平田篤胤全集 第一巻 一〇〇頁
- (三二) 同 右 九九頁
- (三三) 同 右 九九頁
- (三四) 同 右 一〇〇頁
- (三五) 古伝通解二 大國隆正全集 第六巻 六一頁

(三六)	同	右	六四頁
(三七)	同	右	六五頁
(三八)	同	右	六五頁
(三九)	同	右	六六頁
(四〇)	同	右	六六頁
(四一)	同	右	六六頁
(四二)	同	右	六六頁
(四三)	同	右	六六頁
(四四)	同	右	六七頁
(四五)	同	右	六七頁
(四六)	同	右	六七頁
(四七)	同	右	七〇頁
(四八)	同	右	七〇頁
(四九)	同	右	七〇頁
(五〇)	古伝通解三	右	一七六頁
(五一)	同	右	一七六頁
(五二)	同	右	一七五頁
(五三)	同	右	一七五頁
(五四)	同	右	一七五頁
(五五)	同	右	一八二頁
(五六)	同	右	一八三頁
(五七)	同	右	一八三頁
(五八)	同	右	一八三頁
(五九)	同	右	一八三頁
(六〇)	同	右	一八四頁
(六一)	同	右	一八四頁
(六二)	同	右	一八五頁
(六三)	同	右	一八九頁
(六四)	神理一貫書	右	二一八頁

大國隆正全集 第五卷

(六四)	同	右	二一九頁
(六五)	古伝通解四	右	一九二頁
(六六)	本学孝要下	右	四二頁
(六七)	同	右	四二頁
(六八)	同	右	四八頁
(六九)	同	右	四八頁
(七〇)	同	右	四九頁
(七一)	同	右	五〇頁
(七二)	同	右	五〇頁
(七三)	同	右	五〇頁
(七四)	同	右	五〇頁
(七五)	同	右	五二頁
(七六)	同	右	五二頁
(七七)	同	右	五二頁
(七八)	神理一貫書	右	一一六頁
(七九)	古伝通解四	右	一一三頁
(八〇)	同	右	一一三頁

(八一)	同	右	三二〇頁
(八二)	同	右	三二〇頁
(八三)	同	右	三二一頁
(八四)	古事記伝三	右	一五四頁
(八五)	古史伝一	右	一三〇頁
(八六)	同	右	一三一頁
(八七)	天都詔詞太詔詞考二	右	二〇七頁
(八八)	天都詔詞太詔詞考三	右	二六三頁
(八九)	神理一貫書一	右	一一三頁
(九〇)	同	右	一一三頁
(九一)	学運論一	右	三〇頁

大國隆正全集 第四卷

彼は特にこの様に訓んでいる。理由は次の説明で明らかであらう。

(九二)	平田篤胤全集	第一卷	三二一頁
(九三)	本居宣長全集	第一卷	一五四頁
(九四)	大國隆正全集	第七卷	二〇七頁
(九五)	大國隆正全集	第七卷	二六三頁
(九六)	大國隆正全集	第五卷	一一三頁
(九七)	大國隆正全集	第四卷	三〇頁

(九三)	神理一貫書	大國隆正全集 第六卷	一二二頁
(九三)	馭戎問答上	大國隆正全集 第一卷	七五頁
(九四)	同 右		七六頁
(九五)	同 右		七七頁
(九六)	同 右		七八頁
(九七)	同 右		七八頁
(九八)	同 右		七九頁
(九九)	同 右		七九頁
(一〇〇)	同 右		九八頁
(一〇一)	同 右		九九頁
(一〇二)	同 右		九九頁
(一〇三)	同 右		九九頁
(一〇四)	天都詔詞太詔詞考一之上	大國隆正全集 第七卷	一三一頁
(一〇五)	神理一貫書	大國隆正全集 第五卷	一二二頁
(一〇六)	同 右		一九頁
(一〇七)	同 右		二〇頁
(一〇八)	馭戎問答下	大國隆正全集 第一卷	一二二頁
(一〇九)	三教一致弁	大國隆正全集 第四卷	一二二頁
(一一〇)	同 右		一二二頁
(一一一)	古事記伝一	本居宣長全集 第一卷	七頁